

哲学すること

——「ちびてつ」という試み——

有路 憲一

キーワード：哲学 こども Philosophy for Children (P4C)

1. なぜ、「哲学」なのか？

いま、公教育の文脈において、「哲学」は注目を集めている。以前より、国内外を問わず大学を含めた高等教育においては、「哲学(哲学科)」「倫理学」は取り扱われているが、それらは「哲学者の説を解説する」「哲学史を知る」という、あくまでも学問としての「哲学」(つまり、「哲学を勉強する」)であった。

世間的には、「哲学」とはとても堅苦しく、ただただ哲学者たちの「考え」を知るという退屈で難解な営みだと思われるようである。しかし、「哲学」とは、「哲学を勉強する」ということではなく、本来は「**哲学する**」という行為そのものの—あることについて、主体的に【考える】、そして他者と【対話する】—ことを意味するものである。

いまは、この「哲学する」という行為そのものを、「哲学の教育(Philosophy Teaching)」として、そこに教育的な価値を見出そうとする動きが活発化している。以下は、UNESCO(国際連合教育科学文化機関 United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization)による哲学教育の啓発を謳った宣言である。

PARIS DECLARATION FOR PHILOSOPHY

We, the participants in the International Study Days on “Philosophy and Democracy in the World” organized by UNESCO in Paris on 15 and 16 February 1995,

Note that the problems with which philosophy deals are the universal problems of human life and existence;

Believe that philosophical reflection can and should contribute to the understanding and conduct of human affairs;

Consider that the practice of philosophy, which does not exclude any idea from free discussion and which endeavours to establish the exact definition of concepts used, to verify the validity of lines of reasoning and to scrutinize closely the arguments of others, enables each individual to learn to think independently;

Emphasize that philosophy teaching encourages open-mindedness, civic responsibility, understanding and tolerance among individuals and groups;

Reaffirm that philosophy education, by training independently minded, thoughtful people, capable of resisting various forms of propaganda, prepares everyone to shoulder their responsibilities in regard to the great questions of the contemporary world, particularly in the field of ethics;

Confirm that the development of philosophical debate in education and in cultural life makes a major contribution to the training of citizens, by exercising their capacity for judgment, which is fundamental in any democracy.

Committing ourselves to do everything in our power in our institutions and in our respective countries to achieve these objectives, we therefore declare that:

All individuals everywhere should be entitled to engage in the free pursuit of philosophy in all its forms and all places where it may be practised;

Philosophy teaching should be maintained or expanded where it exists, introduced where it does not yet exist, and designated explicitly as “philosophy”;

Philosophy teaching should be provided by qualified teachers, specially trained for that purpose, and should not be subordinated to any overriding economic, technical, religious, political or ideological requirements;

While remaining independent, philosophy teaching should wherever possible be effectively linked to academic or vocational training in all fields;

The distribution of books which are accessible both in language and in sales price to a wide readership, the production of radio and television programmes, audio and video-cassettes, the use for educational purposes of all forms of audiovisual and informational technology, the creation of multiple opportunities for free discussion, and all types of initiative likely to provide the largest possible number of people with a grounding in philosophical issues and methods should be encouraged with a view to providing philosophy education for adults;

Knowledge of philosophical insight in different cultures, comparison of what each has to offer, analyses of what brings them closer together and what separates them, should be pursued and supported by research and teaching institutions;

Philosophy as the free pursuit of inquiry, cannot consider any truth to be final, and encourages respect for the convictions of the individual but should in no circumstances, at the risk of denying its own nature, accept doctrines which deny the liberty of others, affront human dignity and sow the seeds of barbarity.

教育としては、学力の礎となる「知識(知る)」の充実や伝播も重要なことではあり、そのことに異を唱えることはない。しかし、学力の充足と同等に、若しくは更にそれ以上に重要なことに、自ら【問い】そして【考える・探る】そして【わかる】という「考える力」の育成・涵養こそ肝要なことである。そのことは、日本の近年の教育の方針(新学習指導要領・生きる力)等においても顕著に見て取れる。

第30条

2 前項の場合においては、生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない。

ここには、学力の重要な3つの要素が示されている。

- (1) 基礎的・基本的な知識・技能
- (2) 知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等
- (3) 主体的に学習に取り組む態度

「我々はこれからの子供たちに必要となるのは、いかに社会が変化しよう、自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力であり、また、自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性であると考えた。たくましく生きるための健康や体力が不可欠であることは言うまでもない。我々は、こうした資質や能力を、変化の激しいこれからの社会を“生きる力”と称することとし、これらをバランスよくはぐくんでいくことが重要であると考えた。」

(諮問「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」に対する第1次答申)

このような(これまでにはなかった)学力観の後ろ盾を受けると、「哲学」は、教育の中にごく自然と位置づけられる。なぜなら、「哲学する」という行為は、まさにこの「考える力」「生きる力」の鍛練となるからである。なぜなら、「哲学する」とは、すなわち【問い】そして【考える・探る】そのものであるからである。

そして、「哲学する」には、「正解」というものはない。正解のない問いについて他者と考えるということは、一見無駄とも思えるが、子どもたちが実社会において直面

する問題のほとんどは、正解のない問題である。各々が納得すれば(「納得解」)、それがその人にとってその問題の「正解」となる。普遍的に誰にでも当てはまり、数学的にいつでもどこでも「正しい」という正解は、社会において私たちが直面する問題にはない。

このように、「哲学する」とは、これまで学校教育の中ではあまり体系的には取り上げられなかった(そのため十分には育成できなかった)「ある部分」を補うことが期待できる。その「ある部分」とは、昨今の文部科学省の方針に見るまでもなく子供たちには不足していると痛感される「生きる力」「考える力」である。「哲学する」は、従来の学校教育が苦手としてきたところを補完してくれるものであり、教育の一環として、「哲学する」を実践することは有意義なことである。

2. なぜ、「子ども」なのか？

「哲学」は、どうしても難しいという印象からか、「大人」のためのもの、「大人」がすること、「大人」でないとできないことだと誤解されているようである。

「小学生に哲学を教える」などと言えば、おそらく訝られるだけであろう。それは、「哲学」が、いわゆる講壇哲学を意味することが、一般化しているからである。哲学が教えられるのは、大学の文学部の哲学科といった特殊な場所であるという前提を疑うことを、「子どものための哲学」は要請する。(van der Leeuw 2007)

実は、哲学の徒は、古来より「子ども」である。子どもほど自分で【問い】そして【考える】ことを得意とするものはなく、その行為を子どもほど純粋に楽しく行えるものもない(永井 1997)。「哲学する」という行為は、むしろ子ども向きであり、大人こそが苦手とする。

近年、このように、哲学の徒「子ども」に「哲学する」を行わせるという試みが広まりつつある(永井 1997; バーンズ 1985; ブルニフィエ 2006; 野矢 2013)。この試みは、子どもの哲学 Philosophy for Children (略称 P4C)と呼ばれ、哲学者 Matthew Lipman 氏が創り出したものが出発点である。

国内外で、この「子どもにこそ哲学を」という流れがあり、公教育の一環として実施されている活動も、広がり増えているようである(土屋 2011)。しかし、それらの多くは、子ども=10歳~12歳が多い(Kay & Thomson 2006)。中には、高等教育での試みも、広く「子どもの哲学」と括られていることもある。だが、「子どもの哲学」という時に、主役となる「子ども」とは、幼児こそ相応しい(cf. 土橋&ラルラ 2005)。

3. 「ちびてつ」という冒険的試み

「哲学する」という行為において、古くから大事にされてきている手法は、【対話】である。答えがない問いについて、他者との【対話】を通じて、問いへの考えを深め

ていく作業、それが「哲学する」というものである。そのことを正面から考慮すると、【対話】がないものは、「哲学する」とは言い難い。「子どもの哲学」において、【対話する】ということの要件とすると、【対話】をするにはまだ十分ではない幼児に「哲学する」を行わせるというのは、無謀とも言える。



ただ、幼児による哲学は、事例がないわけではない。私が知る限り、映画『ちいさな哲学者たち』は、そのひとつの事例である—子どもが生まれながらに持っている「考える力」をさらに高め、生きていくための知恵を磨こうという発想から、フランス・パリ近郊の ZEP (教育優先地区) にあるジャック・プレヴェール幼稚園に 2007 年、哲学をす

るクラスが開設された。映画『ちいさな哲学者たち』は、幼稚園児(3 歳から 5 歳)が哲学をするという実験的な試みを描いたドキュメンタリー。

ひとつの事例を汎化することはできないが、幼児(3 歳前後)であっても、考えを引き出す工夫次第では、【対話】も可能であるし、引き出す側がじっくりと幼児を観察していれば、考えの萌芽が一瞬でも見えることがある。それを逃さず、紡ぎだしていけば、幼児であっても「哲学する」はできる—それが、私たちの冒険的な試み「ちびてつ」(3 歳～5 歳児が「哲学する」)である。¹



毎回、哲学議題を提示し、その題について幼児(3 歳～5 歳)が【考える】。まさに、「哲学する」を行う。これまで行った哲学議題は、

「好きって何？」

「嫌いって何？」

「ともだちって何？」

「おとなって何？こどもって何？」

「死ぬって何？」

「生きるって何？」

「じぶんって何？」

(他にも、「やさしさって何？」「じゆうって何？」「豊かさって何だろう？」「正義って何？」「価値って何だろう？」「ウソって悪いの？」「ホンモノ／ニセモノって何？」)

なぜ、ということとは尋ねずに、本態を問うように「○○○とは何か」という本質的な問いを敢えて挑戦的に投げかけている。毎回、それぞれの問いについて、観察しているこちらをハッとさせるような「考え」が出てくることもあり、幼児(3 歳～5 歳)が「哲学している」ことが萌芽的であれ分かる。

「なんでもできなくていい、でもできる。それが大人。」
(おとなって何？こどもって何？より)

「赤ちゃんから大人になるには3つの願いごとを胸でぎゅーってする。」
(おとなって何？こどもって何？より)

「時計をしているのが大人。」
(おとなって何？こどもって何？より)

「おとなは何をしてもおとな。こどもは何をしてもこども。」
(おとなって何？こどもって何？より)

「天国でも会えるのはともだち。」
(ともだちって何？より)

「生は肌色。」
(生きるって何？より)

「生は白。死は黒。」
(生きるって何？より)

「生まれたから生きていて、何のために生きているかはわからない。」
(生きるって何？より)

「植物は生きていない。おひさまと水の力で生きている。」
(生きるって何？より)

「人間は生きているけど、髪の毛は生きていない。」
(生きるって何？より)

「冷蔵庫やエレベーターは生きていない。でも、ドラえもんは生きている。同じロボットだけど、頭があるから。」
(生きるって何？より)

「死の温度は冷たい。忘れるのも、忘れられるのもいや。」
(死ぬって何？より)

「生きてるから死ぬに変わるとき、変化するものは何もない。」
(死ぬって何？より)

「生きているときと死ぬときで、変わるものはなにもない。でもお父さんとお母さんに会えなくなる。」
(死ぬって何？より)

「誰でもいつか死ぬ。生きるのに必要なものは、空気、ごはん、地球、そして家族。」
(死ぬって何？より)

このような哲学議題を、大人が「哲学する」ことができるかと言われると、大人の方が純粹に自分で【考える】ことが難しい。子ども(況してや幼児)は「哲学する」はできない、というのは、大人の“思いこみ”である。子どもは、「哲学する」生粋の哲学者である。

多くを知らない方が、柔軟に思考できる。「哲学する」ことが得意な「子ども」に哲

学してもらうことは、とても自然なことで、無理難題なことではない。たとえそれが、幼児(3歳～5歳)であっても、「哲学する」は行える。それが、「ちびてつ」という試みをするので、まだ輪郭のみであるが、つかみかけている手ごたえである。

参考資料

ちびてつ 趣旨書

「哲学」と聞くとー？

多く人は、「哲学」とはとても堅苦しく、ただただ哲学者たちの考えを知るという(退屈な)営み、そして難解なことだと思われるようです。

わたしたち【ちびてつ】が行う「哲学」は、「哲学」といっても、哲学者の思想を学ぶわけではありませんー

わたしたち【ちびてつ】が行う「哲学」は、【考える】という行為そのものです。正解はありません。【ちびてつ】

では、子どもが哲学を学ぶのではなく、子ども自らが哲学する(=何かについて考える)、ということを行います。

【哲学する】という行為は、大人向きと思うかもしれませんが。子どもにはできっこないと思うかもしれませんが。しかし、哲学の徒は、古来より、子どもです。子どもほど【問い】そして【考えるー〇〇〇ってなんなのだろう??】ことを得意とするものはなく、その行為を子どもほど純粋に楽しく行えるものもいません。

【哲学する(〇〇〇って何なのだろうと考える)】は、むしろ子どもたちには簡単にできること、やっていることなのです。日常のすべてを疑問に感じている子どもたちは、誰もが元より哲学者なのです。子どもたちは、生粋の哲学者と言えます。

【ちびてつ】は、自分で考える(哲学する)ことの楽しさを体験してもらいたい、そして私たちもその楽しさを共有したいと思い、子どもたち自らが哲学する場をつくりましたーそれが【ちびてつ】です。

【問い】は、子どもたちのごくごく身近なことから始まりますー「好きって何?・きらって何だろう?」「じゅってどういうこと?」「ともだちってなに?」「やさしさってなに?」「ウソって悪いの?」「ホンモノ/ニセモノって?」などなど

そこから、だんだん子どもたちが考えたことのないようなことまでー「豊かさって何だろう?」「大人と子どもって何が違うんだろうか?」「正義って?」「価値ってなんだろう?」「じぶんって何?」…

3歳でも4歳でも、言葉を操ることができなくても、【哲学する(考える)】はできます。子どもたちが、じっくり考える行為ができるような、たくさんの工夫を用意します。

【ちびてつ】は、2013年10月より半年間、えんぱーくに、子どもたちが哲学する場を用意します。

- ちびてつ vol. 1 10月19日(土曜日)
- ちびてつ vol. 2 11月16日(土曜日)
- ちびてつ vol. 3 12月21日(土曜日)
- ちびてつ vol. 4 1月25日(土曜日)
- ちびてつ vol. 5 2月15日(土曜日)
- ちびてつ vol. 6 3月15日(土曜日)

注

¹ ちびてつ、は、運営スタッフ始め多くの方々の支援を受けることで初めて実施することができている。平嶋祐佳(信州大学教育学部3年 実践教育)、野田桐子(塩尻市市民交流課)、濱祥子(信州大学教育学部2年 ちびてつ代表)、小向佳乃(信州大学人文学部2年 ちびてつ副代表)、考えるゼミ有志には、ここに感謝申し上げる。

参考文献

1. 土橋寶 & メヒトヒルド・ラルラ 2005. 幼稚園児と哲学するー自然教材での遊びの開発可能性に関する教育方法的考察. 学校教育実践学研究 11, 141-152.
2. Kaye, S. & Thomson, P. 2006. *Philosophy for Teens: Questioning Life's Big Ideas*. Prufrock Press.
3. マリリン・バーンズ 1985. 考える練習をしよう 晶文社
4. 永井均 1997. 子どものための哲学対話ー人間は遊ぶために生きている！ 講談社
5. 野矢茂樹 2013. 子どもの難問ー哲学者の先生、教えてください！ 中央公論新社
6. オスカー・ブルニフィエ 2006. よいこととわるいことって、なに？ 朝日出版社
7. 土屋陽介 2011. 国内外における「子どものための哲学」の教室から (ワークショップ「子どもは哲学するか」配布資料)
8. van der Leeuw, K. L. 2007. Some issues in philosophy for children. 学習開発学研究 1, 19-27.

(信州大学 全学教育機構 准教授)
2014年3月7日受理 2014年3月7日採録決定